

人」は遂に、如何になりたるか。誘惑と知りつゝも猶彼の言葉には幾多の貴き真理と知を含めることをこばみ得ぬわれば！ユリラスにもましてその言葉に恍惚するわれば！わが晩年の悲劇はユリラスにもまして悲惨なるかも知れず。

さはれあの「見知らぬ人」はそも／＼神か悪魔かた人なるか。

しかしながらその彼を描きたる或は作り出したる作者トルストイ自らは？彼れが晩年に於けるあの悲惨なる出奔！そは何を意味するものぞ。

彼は信仰厚きバンフイリラスを描き、見知らぬ人を描き主人公ユリラスをして一度二度三度までも見知らぬ人のまことらしき誘惑に陥らしめ、終には見知らぬ人を棄て、バンフイリラスの許へ走らしむその意圖するところは何ぞ。

あゝ彼も亦八十幾歳をもて出奔せり。ユリラスは幾度か絶望し悲觀したれども、その都度行くべき慰安の懷を有ちぬ。しかれども彼には果してそれがありしか。そも彼は平和の臨終を持ちしか。おそらくはその偉大なる苦闘悪戦の生涯の最後に於て、遂に

クライマックスの絶頂に達したるにはあらざりしか。

偉大なりし彼の人格！彼の生涯！バンフイリラスと見知らぬ人と、神と、悪魔と、光と、闇と、そのすべてを一心に収めてのあの大きな苦惱！彼は決してユリラスの如くその一つに迷ひ、その一つに安慰を得る底の人にてはあらざりしなり。

あの偉大なる人格の破綻、目もあてられぬ人生の大悲劇！

わが信奉する「生命」と「眞實」とは偉大なりしこの先人にしてかくの如き運命に到らしめしことを既に目撃せしわれ、そして再び小さきながらに、その同じ道へと踏み入らんとしつゝあるわれ。あゝわれ。

今にわれこの決心と覺悟とを有つ。「眞實」われを見棄つるか。われ、眞實と離るゝか。はた眞實がわれにそを命することあるに到るとき、而してその時なほわがうちにかけき光の残りをらば、その時こそためらふどころなく「光の中を歩む」に到るべし。

その時まで待つとも猶遲きに過ぐることはあるまじ神は廣き慈愛の御手を舉げて、さまよひし小羊の一

匹をも、ねぎらひ迎へ給はむ。トルストイはそをわれに示せり。

只あくまで眞實に「如實の道を」「生命の道」を辿りゆけ。「光！」こゝにも猶かすけき「光」はあるべきを。(大正八、二、十二)

## 我等をして

ヤ、ツ、

我等をして、臆病なる人たらしむること勿れ。臆病は、我等が恥づべき不徳なり。

我等をして、水をも濁さぬ人たらしむること勿れ。地獄にも行き得ざる人たらしむること勿れ。

欲求はそれ自ら不善なる何物にも非ず。凡ての活動は欲求に淵源す。只、それを遂行すべき手段方法の正なるか將た邪なるかによりて、善なるか將た惡なるかの結果を生ずるのみ。

欲求をして盛ならしめよ。而してこれを正當に遂げしむる爲に冷靜なる理性を伴はしめよ。

正當なる手段方法をえらぶこと。此處に我等が一難處は生じ來る。

明らかなる理性をして、盲目なる本能の騎り手たらしめよ。理想をして現實を導かしめよ。靈をして肉を支配せしめよ。先づ我等をしてまことの眼を開かしめよ。

靈と肉とのいたましき苦闘。理性と感情との眞剣なる戦ひ。我等はこの戦闘の勇ましき雄さを見る毎に崇高なる感激のわが全身全靈をうごかすを覺ゆ。

未だこゝろみに遭はざる人は、既にこゝろみに遭ひ而して不幸そのこゝろみに失敗せる人を、そしるべき何等の權利をも有せず。

臆病者にして道徳人なる人は、その道徳人なる稱呼を我身にはこる何等の權利を有せず。

激しきこゑの苦闘に榮ある勝利を得たる人。その人こそは聲高らかにその稱呼を名乗り得べき人なれ。

惡戯をする元氣もなき子供が惡戯をせずとて何とて賞むべきぞ。さ様な子供は醫師に伴れ行け。惡戯をすべき元氣ありて、しかも惡戯はせぬ子供こそ大いに賞むべき子供なれ。

されば若き我等をして元氣ならしめよ。而して我等をして常に正しからしめよ。

人間は禽獸と超人との間を繋ぐ一の索なり。ある哲人はかくいひぬ。實に我等は神なる一面と獸なる一面とを併せ有す。我等のうちの戦ひに決して禽獸をして勝たしむることなかれ。道德は人間のみにあり。須らく我等をして榮ある道德者たらしめよ。

一の勝利より来る一の觀喜。それこそ、汝の苦闘に對する自然があたへたる報酬なれ。

而して汝のその戦ひの目的は、汝の盛なる欲求をして正當ならしむるにある也。

## 實盛塚

文三 壽 夢 子

加賀は篠原の里、松林は松林に續き、その中に不規律に畑や草原が點在し、林を越して日本海の怒濤がすさまじく響を傳へて来る所、畑通ひの農夫か、村から村に行く漁夫の他には、過ぎる人も稀なやうな所、松聲と濤聲と相和する中に、寂然として一つの古墳がある。

「落行く勢の中に、武藏の國の住人長井齋藤別當實盛は、存する旨ありければ、赤地の錦の直垂に、蒔黄絨の鎧著て、鍬形打つたる甲の緒をしめ、金作の太刀を帶き、二十四差いたる、截生の矢負ひ、滋藤の弓持て、連錢葦毛なる馬に金覆輪の鞍置て乗たりけるが、御方の勢は落行けども、唯一騎返合せ返合せ防ぎ戦ふ。」とは、平家物語に實盛の最期を叙する一節であるが、壽永二年春の頃、平家は俱利伽羅の一敗に、篠原に引き退いて人馬の息を休める間もなく、潮のやうに押寄せて来る木曾勢、一人も踏み留まつて戦ふ者もない中に、我こそはと云つて、白髪を染めて潔く敵に向つたのは此老武者であつた。實盛も今度北國にて討死せんと思切つて候へば、二度命生きて都へは歸まじき由、大臣殿へも申上げ……」と云つた覺悟の通り、篠原の合戦に見事討死した。

それを葬て此古墳を實盛塚と云ふ。墳上に偃松一株古を語り顔に濱風に領いてゐる他には、特別に石碑もなく、僅に塚を廻らした竹垣が破れて、一入憐を添へてゐる。

名所古蹟を訪ふ人も稀に、殆んど世人に忘られたやうに、長い年月の間をこの淋しい松風の音と、波の音との中に埋れて過ぎてきた。懷古の情を味はひ得る者は、この塚の邊りに立つて、平家の末路を嘆く事もできやう。戦の首途に於ける潔い覺悟の言葉を思ひ、實盛の最後に感動する事もできやう。更に、幾百年の星霜を風雨にさらされながら、猶も古を語らうとしてゐるかのやうな此古墳を思へば、過ぎ去つて行つた永却の時を、まざまざと眼の前に見るやうな心地がするであらう。

思一度其處に到つた時には、潮の音は軍勢の襲來する響かとも聞かれ、松吹く風の音は今酣な合戦のごよみかとも聞かれやう。塚より東に在る手塚山の麓を夜中通る者は、カチカチと云ふ劍の音を聞くこと、云ひ傳へられてゐる。自然は何をも語らないけれども、この古墳の邊りに立てば、胸に湧く深い感慨に暫しは立ち去る事ができないのである。

北國の僻郷なればこそ、城を守る松林は廣々と續き今も昔のやうに波の音と、松風の音ばかりが聞こえるのである。時折漁砂を踏んで行く他には、永眠の

夢を驚かす何者も近づかないのである。よしや陸續として訪ふ人もなく、香花の手向けが稀だとしても、猶文明の利器が轟々の響を傳へてくるやうな都に近い古蹟よりも、遙に幸福であらうと思ふ。

## 野のみち

さ わ ら び

わかくさのもゆる野の道はろはろと  
行き行くごときわか世なれかし

野にくれば草にひそめるよろこひと

かなしみと二つわかむねに入る

さみしさはわかゆひさきにまつはれる

摘みし小草のにはひなりけり

桑つむと朝の畑路素足して

黒き土ふむうれしきころ

一しきりたちはなの香のなかれくる

紀伊の山路の雨の朝あけ

濃みどりのかつらき山と和泉山

そのかひまよりながれくる朝

夏はうれし黒きうしほのさかまける